

半七捕物帳

向島の寮

岡本綺堂

青空文庫

慶応二年の夏は不順の陽気で、綿ぬきという四月にも綿衣わたいれをかさねてふるえている始末であつたが、六月になつてもとかく冷え勝ちで、五月雨さみだれの降り残りが此の月にまでこぼれ出して、煙けむのような細雨こさめが毎日しとしと降りつづいた。うすら寒い日も毎日つづいた。半七もすこし風邪をひいたようで、重い顛顛こめかみをおさえながら長火鉢のまえに鬱陶うつとうしそうに坐っていると、町内の生菓屋ぐすりやの亭主の平兵衛がたずねて来た。

「お早うございます。毎日うつとうしいことでございます」

「どうも困りましたね。時候が不順で、どこにも病人が多いようですから、お店も忙がしいでしょう」と、半七は云った。

「わたくしどもの商売繁昌は結構と申してよいか判りません」と、平兵衛は腰から煙草入れを抜き取って、ひと膝ゆすり出た。「実は少し親分さんにお知恵を拝借したいことがございまして、その御相談に出たのでございますが……。いえ、わたくしの事ではございませんが、家で使つて居りますお徳という下女のことです……」

「はあ、どんなことだか、まあ、伺つて見ようじゃありませんか」

「御承知でもございましょうが、あのお徳という女は生なまむぎ麦むぎの在ざいの生まれでございまして、十七の年からわたくしうちの家へ奉公にま

いりまして、足かけ五年無事に勤めて居ります。至つて正直なの

で、家でも目をかけて使つて居ります」

「あの女中のことは私も聞いていますが……」と、半七はうなずいた。「家でもどうかしてああいふ良い奉公人を置き当てたいものだと云つて、うちの嬢かかあなんぞもふだんから羨ましがっている位ですよ。そのお徳がどうかしましたかえ」

「本人には別に何事もないのでございますが、その妹のことに就きました……。まあ、こうでございます。お徳にはお通つうという妹がございまして、これも今年十七になりましたので、この正月から奉公に出ました。桂けいあん庵は外神田の相模屋という家でございませう。江戸へ出ますと、まずわたくしのところの姉を頼つて来まして、その相模屋へは姉が連れて行つたのでございまして。します

と、その相模屋の申しますには、丁度ここにいい奉公口がある。江戸者ではいけない、なんでも親許おやもとは江戸から五里七里は離れている者でなければいけない。年が若くて、寡言むくちで正直なものに限る。それから一つは一年の出代りむやみで無暗むやみに動くものでは困る。どうしても三年以上は長年ちようねんするという約束をしてくれなければ困る。その代りに夏冬の仕着せはこつちしで為してやって、年に三両の給金をやる」

「ふむう」と、半七は眉をよせた。

この時代の下女奉公として、年に三両の給金は法外の相場である。三両一人扶持ぶちを出せば、旗本屋敷で立派な侍が召し抱えられる世のなかに、ぽっと出の若い下女に一年三両の給金を払うとい

うのは、なにか仔細がなければならぬと彼は不思議に思っていると、平兵衛はつつけて話した。

「お徳はさすがに江戸馴れて居りますので、あんまり話の旨いのを不安に思ひまして、どうしようかと二の足を踏んで居りますと、妹の方は年が若いのと、この頃の田舎者はなかなか慾張つて居りますので、三両の給金というのに眼が眩くられて、前後のかがえも無しに是非そこへやつてくれと強せ請びりますので、お徳もとうとう我がを折つて、当人の云うなり次第に奉公させることになりました。その奉公先は向島の奥のさびしい所だそうでございます。お徳が帰つてきて其の話をしましたので、家では少しおかしく思ひましたが、向うが寂しいところで若い奉公人などは辛抱することが出

来ないので、よんどころなしに高い給金を払うのだらう位にかんがえて、まずそのままになって居りますと、お通が目見得めみえに行つたぎりで其の後なんの沙汰もないので、姉も心配して相模屋へ問い合わせに行きますと、目見得もとどこおりなく済んで、主人の方でも大変気に入つて、すぐに証文をすることになったといふことで、妹の手紙をとどけてくれました。それは確かにお通の直じきひ筆つで、目見得が済んで住みつく事になったから安心してくれ。

奉公先はある大家の寮で、広い家に五十ぐらいの寮番の老爺じいやとその内儀かみさんがいるぎりで、少し寂しいとは思うけれども、田舎にくらべれば何でもない。御主人が月に一度ぐらいつつ見廻つてくるから、その時に給仕でもすればいいということで、勤めもたい

へんに楽だから自分も喜んでいっているというようなことが書いてあったようでございます。お徳もまあそれで安心して、むこうの云う通り、三年以上長年するという証文を入れて帰って来ました」

「その時、妹には逢わなかつたんですね」

「はい。本人に逢いませんけれども、たしかに本人の直筆に相違ございませんから、姉も安心して帰つたのでございます。それは正月の末のことで、それから小半年は別になんの沙汰もございませんでした。おととい見馴れない男がお徳をたずねてまいりまして、向島から来たと云つて妹の手紙を渡して行きましたので、すぐに封を切つて見ますと、あすこの家にはどうしても辛抱していられない、辛抱していたら命にかかわるかも知れない、詳しい

ことはとても手紙には書けないから是非一度逢いに来てくれというようなことが書いてございましたので、妹思いのお徳は半気違いのようになってすぐにも駄け出そうと致します。勿論それも本人の直筆でございますから、嘘はあるまいと存じましたけれど、なんだか不安にも思われますので、その日はもう日が暮れかかっているので止めさせまして、きのうの朝早く店の小僧の亀吉を一緒につけてやりました」

「よく気がつきました」と、半七はほほえんだ。

「まったくこういう時に、一人で出すのは不安心ですからね」

「左様でございます。それからもう八ツ（午後二時）を廻ったかと思う頃に、二人が、くたびれ切って帰ってまいりました。向島

の奉公先というのがなかなか見付からなかつたそうで、おまけに寮番の老爺というのがひどくむずかしい顔をして、そんな者はこつちに居ないとか云つたそうで……。まあ、いろいろ押し問答の挙げ句に、ようよう本人に会わせて貰つたのですが、お通は姉の顔をみるとわつと泣き出して、もうこんな恐ろしい家には一日も奉公してられないから、すぐに暇を取つて連れて行つてくれと云います。そんなことがむやみに出来るもんでありませんから、だんだん宥^{なだ}めてその様子を訊きますと、なるほど変な家でごさいます、お通でなくつても大抵のものは勤まりそうもない家だということが判りました」

「化け物でも出るんですか」と、半七はほほえんだ。「それとも、

油でも舐める娘でもいるんですかえ」

「まあ、それに似寄った話でございます」と、平兵衛はひたいに皺をよせた。「その寮というのは寺島村の奥で、昼でも狐や河獺の出そうな寂しい所だそうでございます。近い隣りには一軒も人家はございません。そこへ行つてから小半月ほどは、お通も唯ぶらぶらしていたんだそうですが、それから寮番夫婦に云い付けられて、土蔵のなかへ三度の食事を運ぶことになりました」

「土蔵の中へ……」

「土蔵の中には大きな蛇が祀まつつてあるんだそうで……。それに三度の食物を供える。それには男の肌を知らない生きむすめ娘でなければいけないというので、お通がその役を云い付けられたのでござい

ます。あんまり心持のいい役ではありませんが、根が田舎育ちでございませうから、わたくし共が考えるほどには蛇や蛙を怖がりもいたしません。それに神に祀られているほどだから、人に対して何も悪いことはしないと云い聞かされているもんですから、平気でその役を勤めることになりました。その土蔵というのは昼でも真つ暗なくらいで、中には何が棲んでいるかわかりません。扉の錠をはずして、入口へ食い物の膳を供えたら、あとを振り返らずにすぐに出て来いと云われているもんですから、はじめのうちには正直にその通りにしていました。三度三度その通りで、はんとき半刻も経って行ってみると、膳の物は綺麗にたべ尽してあるそうでございます。まあ、それで当分は何事もなかったのでございませうが、

四月の二十日はつかのことだと申します。午ひるの膳を運ぶのが例より少し遅くなりましたして、急いで土蔵の扉をあけますと、その錠の音が奥へ響いたのでございましょう。土蔵の二階はしごの梯子がみしりみしりと響いて、なにか降りて来るような様子でございませう

「なるほど」と、半七は煙草をすいながら、耳を傾けていた。

「それがきつと大きい蛇だろうとお通は思ひまして、膳をそこに置いたままで慌てて引つ返そうとしましたが、怖いもの見たさに、扉のかげに隠れてそつと覗いていますと、梯子を降りて来たのは……。その日はいい天気で、しかも真つ昼間でございませうから、土蔵のなかは薄明るく見えましてさうで……。今、みしりみしりと降りて来たのは、一人の若い女のように、黙って膳に手をかけ

たかと思うと、こつちで覗いているのを早くも覺つたとみえまして、細い声でもしと呼んだそうでございます。お通はぞつとして黙つて居りますと、その女は幽霊のような瘦せた手をあげてお通を招いたそうで……。もう堪まらなくなつて、あわてて土蔵の扉をしめ切つて一目散いちもくさんに逃げて帰りました。大蛇だいじやが口をきく筈がありません。きつと幽霊に相違ないとお通は急におぞ毛だつて、それからもう土蔵へ行くのが忌いやになりましたが、自分の役目ですから仕方がございませぬ。その後もこわごわ三度の膳を運んで居りました。しかしだんだん考えてみると、幽霊が飯を食う筈もありません。怖いもの見たさが又手伝つて、天氣のいい日に又そつと覗いてみますと、うす暗い隅の方から大きい蛇——およそ一

丈もあろうかと思われる薄青いような蛇が、大きい眼をひからせて蜿のたくつて来るようです。お通はぎよつとして立ちすくんでいますと、二階の梯子が又みしりみしりという音がして、なにか降りて来るようです。よく見ると、それはこのあいだの幽霊のような女で……。お通は堪まらなくなつて又逃げ出してしまいました」

「だいぶ怪談が入り組んで来ましたね」

「それでもお通はまだ辛抱している積りであつたようですが、この頃たびたび土蔵のなかを覗きに行くことが寮番の夫婦に知れまして、なんでも厳しく叱られて、おまえも縛つて土蔵のなかへほうり込んでしまふとか嚇おどかされましたそうで……。それからいよいよ怖くなつて、いつそ逃げ出そうかと思つても、夫婦が厳重に

見張つていて一と足も外へは出しません。それでも隙をみて、短い手紙をかいて、店の方から来た人にたのんで、姉のところへ届けて貰ったのだそうでございます。お徳もその話を聞いてびっくりました。が、すぐにどうするという訳にも行きませんので、まあ、もう少し辛抱しろとくれぐれも云い聞かせて、忽々に帰つて来ましたようなわけで……。前にも申し上げました通り、ひどく妹思いの女だもんでございますから、どうしたらよかろうと云つて顔の色を変えて心配して居ります。桂庵に掛け合つて貰つて暇を取るのが勿論順道でございますが、三年以上という証文がはいつて居りますから、きつとなにか面倒なことを云うだろうと存じます。といつて、このままに打つちやつて置くのも可哀そうでご

ざいますし、わたくし共にもいい知恵が浮かびませんので、お忙がしいところを御相談に出ましたのでございますが、まあ、これはどう致したものでございましょう」

半七は眼を薄くつむって考えていたが、やがてしずかにうなずいた。

「ようございます。なんとか致しましょう。わたしから桂庵の方へ掛け合つてあげてもいいが、ともかくも証文を反古ほごにするというのは穩かでない行き方ですから、なんとかほかの段取りにしてみましよう。そのお通という娘のことばかりでなく、こりやあ私の方でも少し調べて見にやあならねえことですから、まあ、私に任せてください。桂庵は相模屋ですな」

「外神田の相模屋でございます」

「お徳には心配するなと云つてください。二、三日のうちに何とかしましうから」

「なにぶんお願い申します」

くれぐれも頼んで、平兵衛は帰った。

二

午ひるめし飯を食つてから半七は三河町の家を出て、外神田の相模屋

をたずねると、桂庵でも彼の商売を知っているので、素直に奉公人の出入り帳を出してみせた。この正月の末にお通を目見得にや

つた奉公先は向島の寺島村の寮で、この寮の主人は霊岸島の米問屋の三島であることが判った。

この頃は諸式高直こうじきのために、江戸でもときどきに打毀うちこわしの

一揆が起った。現にこの五月にも下谷神田をあらし廻ったので、

下町したまちの物持ちからはそれぞれに救い米の寄付を申し出た。その

ときに彼のか三島では商売柄とはいいながら、一軒で白米二千俵の

寄付を申し出て世間を驚かしたことを、半七はまだ耳新しく記憶していた。その三島の寮が向島の奥にあつて、そこに何かの秘密がひそんでいるとすれば、猶更うちやつて置くことは出来ない。半七は一旦自分の家へ帰つて、子分の松吉を呼んだ。

「おい、ひよろ松。おめえ御苦勞でも霊岸島へ行つて、三島の様

子をちよつと調べて来てくれ。あすこの家うちに年頃の娘はねえか」

「あすこの娘なら知っています。おきわと云つて近所でも評判のこまちむすめ小町娘で、もう十九か二十歳はたちになるでしょう」

「その娘はどうした。家にいるか」

「それがなんでも三年まえの今時分でしたらう。店の若い者と駈け落ちをしてしまつて、今にゆくえが知れねえそうです」と、松吉は云つた。

「駈け落ちの相手はなんとという野郎だ」

「そりやあ知りません」

「そいつを調べてくれ。そればかりでなく、三島の家の様子も調べて来るんだぜ。そのおきわという娘にきょうだい弟妹があるかどうか。

それをよく洗って来てくれ。いいか」

「ようがす」

松吉はすぐに出て行つた。なにぶんにも頭が重いので、半七は湯にはいつて風邪薬を飲んで、日の暮れないうちから衾よぎを引つかぶつて汗を取っていると、夜の五ツ（午後八時）頃に松吉が帰つて来た。

「親分、ひと通りは調べて来ました。娘と駈け落ちした奴は良次郎といつて、宿は浅草の今戸いまどだそうです。年は二十二で小面こづらのつぺりした野郎で、後家さんのお気に入りだつたそうです」

「で、どこへ行つたか、まったく判らねえのか」

「判らねえそうです。無論に浅草の宿にはいねえんですが、どこ

へ行っていますか」

「おきわには弟妹があるのか」

「ありません。一人娘だそうです」

「そうか」

少し見当がはずれたので、半七は床の上で首をかしげていたが、そのほかにも松吉が調べて来た三島の一家の事情をそれからそれへと詮議して、半七はなにか思い当ることがあつたらしい。にやにや笑いながらうなずいた。

「よし、もうそれで大抵わかった」

「ようがすかえ、それだけで」

「もういい、あとは俺が自分でやる」

あくる朝早く起きると、ゆうべ汗を取ったせいか半七の頭も余ほど軽くなった。陰かげつてはいるが、きようは雨やみになつていたので、半七はあさ飯の箸を措おくとすぐに町内の生薬屋きぐすりやへ行つた。女中のお徳をよび出して、妹の手紙をとどけて来たという男の人相や年頃を詳しく訊いて、その足で更に今戸の裏長屋をたずねた。この頃の長霖雨ながしけで気味の悪いようにじめじめしている狭い露路の奥へはいつて、良次郎の家というのを探しあてると、二畳と六畳とふた間の家に五十近い女と、十四五の小娘とが向いあつて、なにか他人仕事ひとでもしているらしかった。裏店うらだなの割には家のなかなかが小綺麗に片付いているのが半七の眼をひいた。

「あの、早速でございますが、こちらの良次郎さんは唯今どちら

へおいででしょうか」

「はい」と、母らしい女は針の手をやめて見返った。「おまえさんはどこからお出でになりました」

「霊岸島からまいりました」と、半七はすぐ答えた。

「霊岸島から……」と、女は半七の顔をじつと眺めていたが、やがて起つて入口へ出て来た。「じゃあ、三島のお店からですか」

「左様でございます」

云い切らないうちに、女はかまち框から片足おろして、いきなり彼の袖をつかんだ。

「それはこつちで訊きたいんです、俵はどこに居ります。良次郎はどこにいます」

逆捻じさかねを食つて少しあわてた半七は、わぎと仰ぎょうさん山らしく驚いてみせた。

「おかみさん、飛んでもねえことを……。ここの家で知らないで、誰が知っているもんですか」

「いいえ、そうは云わせません。店で良次郎をどこへか隠しているんです。わたしはちやんと知っています。お嬢さんと駈け落ちをしたなんて、嘘です、嘘に相違ありません。良次郎は御主人の娘をそそのかして淫奔いたずらをするような、そんな不心得な人間じゃありません。ここにやまいるお山はほんとうの妹じゃありません。もう一、二年経つと彼あれと一緒にする筈になっているんです。そういう者がありながら、そんな不埒なことをするような良次郎じゃご

ございません。第一あんな親孝行の良次郎が親を打つちやつて置いて、どこへか姿をかくす筈がありません。おまえさんの方で隠しているんです。さあ、どこにいるか教えてください」

氣違ひのような権幕けんまくで責めたてられて、半七もいよいよ持て余した。

「まあ、待つてください。成程そんなことがあるかも知れませんが、私はまったく知らないんです。店の方から云い付けられて、ただ正直に出て来ただけのことなんです。じゃあ、良次郎さんはまったくこちらには居ないんですか」

「いませんとも……」と、女は声をうるませながら云った。「自分の方でどこへか隠して置きながら、白ばつくれて探しによこす

なんて、あんまり人を馬鹿にしている。いいえ、こつちには確かな証拠があります。見せてあげるからお待ちなさい」

女は奥の仏壇の抽斗ひきだしから一通の手紙を持ち出して来て、半七の眼さきへ突きつけた。すぐに受け取ってあげてみると、自分はやんどころない訳があつて、三年のあいだは姿を隠している。三年たてばきつと帰ってくるから心配してくれな。世間ではお嬢さんと駄け落ちしたなどと云い触らすかも知れないが、それにも訳のあることだから、お山にもよく云つてくれ。御主人の為と親の為とで斯こういうことをするのだから、かならず悪く思つてくれるなど書いてあつた。

「この手紙に三十両のお金を付けて、人に頼んでそつと届けてよ

こしたんです」と、女は泣きながら云った。「これが確かな証拠です。御主人の為にと書いてあるじゃありませんか。親の為にとも書いているのを見ると、三年の間どこにか隠れていれば、きっと五十両やるとか百両やるとかいう約束があるに相違ありません。あれは親孝行な人間ですから、そんなことを引き受けて御褒美を貰って、親に楽をさせる料簡なんでしょうが、わたしの方じゃあお金なんぞは要りません。それより一日も早くわが子の無事な顔がみたいと思っています。三十両のお金は幾らか遣いましたけれど、残った分はみんな返しますから、どうぞ倅を連れて来てください。お願いですから」

かれは再び半七の袖を掴んで、ゆすぶりながら泣いて口説いた。

お山という娘も声をたてて泣き出した。

思いもよらない愁嘆場しゅうたんばを見せられて、半七ももう仮面めんをかぶつていられなくなつた。

「おかみさん。もう斯うなりやあ何もかも正直に云うが、わたしは霊岸島から来た者じゃあねえ。わたしは御用聞きの半七という者で、実は少し調べたいことがあつて出て来たんだが、おまえの話でみんな判つた。もう案じることはねえ。良次郎はきつと連れて来てやるから、二、三日おとなしく待つているがいい」

御用聞きと聞いて、女は急に涙を拭いた。そうして、倅のゆくえを探索してくれるようにくれぐれも頼んだ。

お通と良次郎のほかにも、半七はおきわという娘のゆくえをも突き留めなければならなかった。おきわは向島の寮に押し籠められて、土蔵の二階に住んでいるに相違ない。お通が見たという幽霊のような女はそれである。半七は確かにそれと見きわめながらも、まさかにつかつか踏み込んで出しぬけに土蔵の戸前とまえをあけるわけには行かないので、もう少し確かな証拠を握りたいと思った。これは今戸の露路を出ると、すぐに向島の方角へ足をむけると、陰った空は又暗くなって、霧のような雨が煙けむつて来た。途中で番傘を買って、竹屋の渡しを渡って堤どてへ着くと、雨はだんだんに強く

なつて葉桜の堤下はいよいよ暗くなつた。

もう午ひるに近いので、かれは堤下の小料理屋へはいつて、しじみ汁とひたし物で午飯をくつっていると、古ぼけた葭よしの衝ついたて立を境にして、すこし離れた隣りにも二人づれの客が向い合つていた。はじめは二人ともに黙つてちびりちびり飲んでいるらしかったが、そのうちに年上らしい一人の男が微ほろよい酔よ機嫌で云い出した。

「え、おい。あの餓鬼をどうかしてくれねえじゃあ困るじゃねえか。どうで田の草を取つていた日向ひなたくせえ女だ。気に入らねえのは判り切つているが、眼をつぶつて往生してくれ。あいつに逃げられるとまつたく困るから」

若い男は黙つていた。

「あいつの足止めをするのは慾得ばかりじゃあいけねえ。そこで色男に頼むんだ。我慢して相手になつてやつてくれ。恋と情けのしがらみに、とか何とかいうのはここのことだ。なにも一生の女房にするというわけじゃあねえ。ちつとの間の辛抱だよ」

「そんな罪なことはしたくないから」と、若い男は溜息まじりに云つた。

「ひどく聖人になり澄ましたな」と、年上の男はあざわらつた。

「ええ、おい。嘘にもほんとうにもしろ、お嬢さんと駈け落ちをしたという色男じゃあねえか。どうでどぶねずみ 溷鼠だ。今更まじめな面をしたつて、毛の色は白くならねえぜ」

「わたしも今になって後悔している。ふだんから眼をかけて下さ

るおかみさんに口説かれて、よんどころなく引き受けてしまったが、ああ悪いことをしたと此の頃じゃあ切りしきに後悔している。世間からはうしろ指をさされ、親たちには苦勞をかけ、こんな間違つたことはない。もう此の上は誰がなんと云つても、決してそんな相談には乗らないつもりだ。お通という女中もそれほど帰りがるなら、すなおに帰してやったらいいじゃありませんか」

「帰してよければ苦勞はない」と、年上の男は急に声を低くした。「あんな奴でも口がある。うっかり帰してやったら世間へ出て何をしやべるか判らねえ。どうしてもここは色男にお頼み申して、足止めのおまじないをして貰うよりほかにはねえ。え、良さん。おめえ、どうしても忌いやか。毒くわば皿で、おめえも一度こうい

ことを引き受けた以上は、一寸斬られるのも二寸斬られるのも血の出るのは同じことだ。え、おい、器用にうんと云つてくれ。俺から又おかみさんの方へもいいように話してやる。おかみさんだつて野暮じゃねえ。重た増しおもまが出るのは判っているから、素直すなおにおとなしく引き受けてくれ」

「いや、もうなんと云われても私はあやまる。誰かほかの人に頼んで……」

「ほかの人に頼めるくらいなら、口をすぼめやあしねえ。今こそ堅気かたぎの寮番でくすぶっているが、これでも左の腕にやあ忌いやな刺ほりの青のある六蔵だ。おれが一旦こう云い出したからにやあ、忌も応も云わせねえ。おい、良さん、その積りで返事してくれ」

酒の酔も手伝っているらしく、彼の声はだんだんに高くなつた。いやな刺青の講釈まで聞きすまして、半七はもういい頃と衝立のこつちから声をかけた。

「もし、大層お賑やかですね」

「どうもお騒々しくつてお気の毒さまでございます」と、六蔵という男は答えた。「若い者は道楽をして困りますから、ちつと嚇かしているところですよ」

「お察し申します」と、半七は笑いながら云つた。「だが、この頃は世の中がさかさまになつて、年寄りのいう方が間違っていることが随分あります。今の一件なんぞはそつちの若い人の云う方が道理らしい。ねえ、良次郎さん。そうでしよう」

名を指されて二人はぎよつとしたらしい。半七はつづけて云つた。

「左の腕になにかいやな刺青があるとかいう小父おじさん。あんまり若けえ者をつかまえて無理を云わねえ方がいい。どうで靈岸島からは縄付きが出るんだ。その道連れを大勢こしらえるのは殺せつしよ生うだろうぜ」

「な、なんだ」と、六蔵はこつちへ向き直った。「おめえは誰だ」
衝立を押し退けて、半七も向き直った。

「まあ、誰でもいい。おれはこれからお前のあずかっている寮へ行くんだ。案内してくれ」

その口ぶりでもう覺つたらしい、六蔵はあわててふところへ手

を入れようとする途端に、半七は飛びかかつて其の腕を押えた。

六蔵の手はヒあいくち首を握ったままで早縄にかかつてしまった。蒼く

なつてすくんでいる良次郎を見かえつて、半七はしずかに立った。

「おめえには慈悲を願つてやる。おとなしくして、おれと一緒に来ねえ」

縄付きの六蔵を追い立てて、半七は雨のなかを三島の寮へ行つた。良次郎は死んだような顔をして後からぼんやりと付いて来た。びつくりしてうろろしているお通に指図して、半七は奥の土蔵の戸前をあけさせると、暗い二階から幽霊のような若い美しい女が出た。女は三島のひとり娘のおきわであつた。

その明るる日、霊岸島の米問屋三島の店から後家のお糸と番頭

の由兵衛が奉行所へ呼び出されて、すぐに入牢じゆうろうを申し渡された。

三島の主人は四年前に世を去つて、後家を立て切れぬお糸は由兵衛と不義を働いてると、一人娘のおきわがもう十九になつて、親類の手前、世間の手前、相当の婿を貰わなければならぬことになつた。殊に容貌きりよう好しに生まれていたので、諸方から縁談を申し込んで来る。それが由兵衛には面白くなかつた。かれは自分の甥を店の養子に直して、自分が後見人格でこの大身代を掻きまわそうという悪法を巧たくんでいたが、その甥はまだ十五の前髪で、おきわと妻め合あわせるわけには行かない。もう一つには、おきわはなかなか利巧な娘で、自分たちの不義を薄々覚つてゐるらしいので、由兵衛はなにかにつけて彼女を邪魔者と見て、結局お糸

をそそのかして彼女を放逐してしまおうと企てたが、なんの落度もない家付きの娘をむやみに追い出すわけには行かないので、かれは更に大胆な計画を立てた。

色に溺れた四十女のお糸はもう我が子の愛を忘れてしまつて、由兵衛の計画に同意することになつた。由兵衛は先ず寮番の六蔵を抱き込んで、去年の夏おきわをだまして向島の寮へ誘い出して、大きい古土蔵の奥に閉じ籠めてしまつたのである。しかし家付きの娘が突然に消えてなくなつたと云つては、親類や世間の手前が濟まないのです、おきわは店の若い者と駈け落ちをしたということふいちようを吹聴させた。その相手に選み出されたのが彼の良次郎であつた。彼はふだんからお糸や由兵衛に眼をかけられているばかり

か、年も若し、男振りも好し、おきわの相手と云い触らすには恰好の資格を具えていたので、彼はお糸からいろいろ因果をふくめられて、無理往生に承知させられた。身に覚えのない不義の濡ぬれぎ衣ぬきを被きて、しばらく何処にか隠れていてくれれば、三年の後ははきつと取り立ててやる。たとい店へ呼び戻すことが出来ないでも、二百両三百両の纏もまった資本もとを渡して、きつと身分の立つようにしてやるという条件付きで、良次郎は忌々ながらそれを引き受けることになった。

この時代の主従関係で、主人が手を下げて頼むものを無下むげには断わりにくいのと、これを引き受ければ行く行くは親孝行ができるという浅はかな考えとで、良次郎はおきわが押し籠められると

同時に靈岸島の店をぬけ出した。しかし実家へ帰ってはすぐに露
顕するので、彼は綾瀬の方の知己しるべの家しるべに身をかくして、心にもな
い日蔭者になつていた。

おきわを土蔵のなかに封じ籠めてしまったものの、まさかに飢ほ
しころ殺すわけにも行かないので、三度の食物は寮番が運んでいた。

いかに残酷な六蔵夫婦もこれはあまり心持がいい役目でないと、
お糸と由兵衛とがこの寮へ来て密会する場合に、何かの給仕をす
るものが無くては不便であるのとで、若い女中を新らしく抱える
ことになつたが、迂濶なものを引き入れては秘密の発覚する虞おそれ
があるのだ、江戸馴れないほんやりした女を選んだ末に、かのお
通を抱える事になつたのである。そうして、だんだん使っている

と、お通は見掛けよりもしつかりしていて、土蔵のなかの秘密を薄々感付いたらしいので、六蔵もすこし困った。さりとして迂濶に暇を出すのは却って危険なので、その口止め足どめの手段として又もや良次郎を誘い出し、色仕掛けで若い田舎娘を手懐けさせようと企てたのであるが、いくらおとなしい良次郎でもたびたび他人のあやつり人形になることを承知しなかつた。殊にこの頃は自分の前非をしきりに後悔しているので、彼はどうしても素直にそれを承知しないばかりか、却ってお通の味方になって、その手紙を神田の姉のところへ届けてやったので、それが大事を洩らす端緒になってしまった。

それを知らない六蔵は又ぞろ彼を近所の料理屋へ連れ込んで、

半分は強^{こわもて}面でおどしているところを、あたかも半七に見つけられたのであつた。入墨者の彼はふところののんでいた^{あいくち}ヒ首をぬく間もなしに押えられた。はじめはかれこれ強情を張つていたが、土蔵のなかから本人のおきわが現われたのと、良次郎が正直に白状したので、六蔵ももう恐れ入るよりほかはなかつた。

お糸は吟味中に牢死した。六蔵は入墨の前科者だけに罪が重く、悪人と共謀して主人の娘を牢獄同様のところに押し籠めて置いたというので死罪になつた。張本人の由兵衛は無論に重罪であつた。後家とはいいながら主人の妻と不義をかさね、あまつさえ家督相続の娘を押し籠めて其の身代を横領しようとして巧んだのであるから、引き廻しの上で獄門にさらされた。良次郎も相当の処刑を受くべ

きであつたが、主人の命でよんどころなしに引き受けたというのと、かれは日頃孝心の深い者であるというのとで、上にも特別の憐愍れんびんを加えられて、単にきびしく叱り置くというだけで家主に引き渡された。

向島の寮は取り毀された。これは上かみからの命令ではなかつたが、こういう事件を仕出かした以上、三島に向つてその破却を勧告するのが親類の義務であつた。秘密をつつんでいた土蔵も無論に取り崩されたが、お通が見たという大蛇は姿を現わさなかつた。おきわもそんな蛇を見たことはないと云つた。霊ある蛇はわざわいを未然に察してどこかへ立ち去つてしまつたのか、あるいはお通のおびえた眼に一種のまぼろしが映つたのか、それはいつまでも

疑問として残されていた。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行

入力…tatsuki

校正：菅野朋子

1999年8月3日公開

2009年9月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

半七捕物帳

向島の寮

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 岡本綺堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>